

太田至

2011年3月11日におこった東日本大震災と、それに続く東京電力福島第一原子力発電所の事故は、わたしたちに強烈な衝撃をあたえた。押し寄せる津波に飲み込まれてゆく家や車、逃げまどう人びと、そして水素爆発でボロボロになった発電所。こうした映像はわたしたちの脳裏に焼きついて消えることはない。そしてこれは、原発に対する世界の認識をおおきく変えた出来事である。その影響がどこまで及ぶのかは、まだ誰にも見極められないのだが、ここでは、このふたつの出来事がわたしたちに、何を考えさせようとしているのかについて、アルトゥーロ・エスコバルという南米・コロンビア出身のポリティカル・エコロジストの議論を参照しながら、手短かにまとめておくことにしたい。この震災と原発事故によってわたしたちはたいへんな難問に直面しているのだが、これはアフリカ地域研究にたずさわる者が傾注すべき重要な課題と深く関連しているのである。

* * *

最初に、震災と原発事故が提起した困難な問題を、以下の4点にまとめておこう。第一は自然と人間との関係、そして科学的知識の問題である。歴史的にみればヨーロッパを中心とした科学の進展とともに、自然は、社会から切り離されて思考や操作の「対象」となっていた。科学史家たちは、自然が「専門的な知識にもとづいて合理的にコントロールできるもの」と見なされるようになった歴史を論じている。同時に、わたしたちは（自然）科学的な知識を、特定の社会や文化を超えたところに客観的に存在するものとして信頼してきた。しかし今回の津波による大災害は、こうした科学的な知識や技術の無力さ、そしてそれを盲目的に信頼していたわたしたち自身の認知のあり方を、あらためて強烈に暴き立てることになった。津波の被害を「想定外」とかたづけるわけにはいかない。そして現在の科学には、原子力発電を管理・制御する力はない。科学的知識や技術はどこまで有効なのか—科学にもとづく無限の「進歩」を、わたしたちがもはや脳天気信じ続けることはできない。

第二の点は、この「進歩」の問題と深く関連している。わたしたちは、科学の進歩によって快適な生活が実現されてゆくことを疑ってこなかった。しかしながらその生活は大量のエネルギーを消費することをともなっている。衣食住すべてにわたって、わたしたちがいかに「使い捨て」に汚染された生活をしているのかは、大量に発生する「ゴミ」を見れば歴然としている。そして、この大量消費という生活スタイルは、化石燃料の乱費と地球温暖化という深刻な環境問題をひきおこしており、それを解決するために「クリーン」な代替策として推進されてきたのが原子力発電である。この意味でもわたしたちは「進歩」自体を再考しなくてはならない。

第三の重い現実とは、「クリーンで究極の解決策」として建設されてきた原子力発電所が、いずれも周辺地域に立地していることである。放射線科学の専門家である小出（2011）は『原発のウソ』という書物の「まえがき」で、かつて自分は原子力の平和利用に対して夢をもって研究を始めたのだが、その危険性を知ると同時に「原発は差別の象徴だ」と考えるようになったと述べている。同書によれば（p. 103）、電力会社は国の原子力安全委員会が定めた指針にもとづいて原子炉の立地を選定しているのだが、その指針とは「原子炉から一定の範囲内は非居住区域であること」「その外側は低人口地帯であること」そして「人口密集地帯から離れていること」の3条件である。もしも原発が人口周密地域にあり、それに事故が起こった場合にはその被害は甚大なものになるし、被災者に対する補償は巨額になる。だからこそ原発は「田舎」に建設され、そこから大都市に送電されている。日本が経済発展を実現してきたプロセスに、周辺地域の人びとは「危険を引き受ける」という形で組み込まれてきたし、都市住民はこうした人びとの「犠牲」のもとに、快適な消費生活を享受してきたといってもよい。そしてこうした構造は、グローバル資本主義が拡張する過程に第三世界が底辺・周辺として編入されているという現実とまったく同型であることはいうまでもない。

原発事故がわたしたちに突きつけた第四の課題は、情報や知識のコントロールに関連する。政府や東京電力は、事故がおきた原子炉の状態や、漏洩した放射線の種類・量などについての情報を選別して開示してきたし、都合の悪い情報は隠蔽してきた。そのために外部の専門家たちは状況を正確に判断することができなかつたし、一般の人びとは「事態はそれほど深刻ではない」というあやまった印象をもたされることになった。こうした知識や情報の操作をとおして、強力な権力をもつ少数のものが大多数の人びとを排除し、支配するという事態が生み出されるのである。

* * *

以上のように東日本大震災とフクシマは、わたしたちが実践しているアフリカ研究と密接に関連する問題を提起している。ここには、自然と人間の関係、科学的知識の有効性と「進歩」、際限のない経済発展という神話、大量のエネルギー消費、地球温暖化、中心による周辺の収奪、環境汚染、知識や情報の政治的コントロールといったように、グローバルな課題が関与している。こうした課題は、じつはわたしたち自身がアフリカ地域研究を続けるなかで、調査地の現場から発信されるシャープな批判として学んできたもののはずである。そして、こうしたテーマについてポリティカル・エコロジーの立場からラディカルな発信をしてきた論客のひとりが、アルトゥーロ・エスコバルである。

エスコバルは、開発批判とポリティカル・エコロジーの理論家として知られている。たとえば、2011年に出版された『Key Thinkers on Space and Place』（Hubbard & Kitchin, 2011）は人文地理学を中心とする社会科学のエンサイクロペディアだが、そのなかでエスコバルの業績は、フーコーやブルデュー、ギデンズ、バトラー、サイード、スピヴァクなどの蒼々たる思想家とともに紹介されている（Batterbury & Fernando, 2011）。それによ

ればエスコバルは、1952年にコロンビアのマニサレスに生まれた。学部時代には化学工学や生物化学を学び、その後アメリカのコネル大学に留学して食物学や国際栄養学の分野で1978年に修士号を取得している。つまり彼は、最初は自然科学者として研究を始めたのだが、やがて、社会科学に大きく方向転換してゆく。彼は、フォーコーによる知識と権力の相互関係に関する議論に依拠しつつ、するどい開発批判を展開するポスト開発理論の思想家として注目されるようになった。すなわち彼は、開発とは、ヨーロッパ諸国を中心とした権力の追求や他者支配に関連する言説とみなすべきであると主張する。そして、第三世界における社会的なリアリティが形成されるプロセス—たとえば「貧困」という概念の形成—には、先進諸国による権力行使としての開発が深く関与してきたと批判したのである (Escobar 1991, 1995; 足立 1995)。

こうした活動の一環としてエスコバルは、ダボスで毎年開催されている「世界経済フォーラム」に対する批判にも大きく関与している。この会議には、国家元首をはじめとする政治家やグローバルに展開する大企業の経営者、ジャーナリストや知識人など、世界のエリート層が集まり、世界規模の諸問題について議論する。しかしこのフォーラムは、資本主義とネオリベラルなグローバル化の拡大によって貧困を増幅し、環境を破壊している張本人たちの集まりとして批判されている。そして、こうした先進国や富裕層による支配に抵抗し、それを克服することを目的として「世界社会フォーラム」が開催されるようになった。この「対抗フォーラム」では、グローバル化にともなう社会的不平等の拡大や環境破壊の問題を批判的に議論しているが、エスコバルは、その社会運動を主導する人物のひとりである (セン他、2005)。

エスコバルはまた、1990年代の中頃からは、コロンビアの太平洋岸でフィールドワークをおこない、その結果をふまえて「場所 (place)」や「テリトリー」といった地理学的な概念をもちつつ、ポリティカル・エコロジーの議論を広く展開していった (Escobar, 2008)。また、生物多様性や自然保護という問題系を社会運動という視点から論じた論文 (Escobar 1998) や、「文化的なもの」と「自然」との両方を視野にいれた人類学的なポリティカル・エコロジー論を理論的に展開した論文 (Escobar 1999) など、おおきな反響を呼んだ研究を続けてきた。その仕事の全容をここで紹介することはできないが、以下には、グローバル化の進展にともなって生起する「自然資源をめぐるコンフリクト」をポリティカル・エコロジーの枠組みによって論じた仕事 (Escobar 2006) を、簡略化して紹介することにしよう。

* * *

ネオリベラルなグローバル化の進展にともなって自然資源や環境をめぐるコンフリクトが世界中でおきている。こうしたコンフリクトは、資源にアクセスすること、そして、資源の配分をコントロールすることを争点として生起している。こうしたコンフリクトをポリティカル・エコロジー論の枠組みをつかって理解するためには、このコンフリクトには生態学的次元、経済的次元、そして文化的次元という相互に関連する三つの次元が存在し、

そのどれもが同じように重要であることを理解する必要がある。また、グローバル化の過程で差異がどのように産出されるのか、あるいは「同化」という形をとって差異が否定されるのか、そしていかにして不平等が生成するのかを考えることが重要である。

現在、際限のない経済発展を指向する活動は、世界中で環境破壊をおこなっている。そして、熱帯降雨林の減少、生物多様性の喪失、食糧問題、漁業権、都市化、地球温暖化などをめぐって環境保護運動がおこなわれている。こうした運動には、ふたつの重要な共通性がある。ひとつは、これが富める者と貧しい者とのあいだの争いであること、もう一つは、普遍性を主張する資本主義的な経済モデルの拡大に対して、ローカルな世界観や文化を守ることが目指されている点である。

資源をめぐるコンフリクトが上記の三つの次元をもつことは、たとえば熱帯林めぐっておきている事態を考えてみればよくわかる。そこで起こっていることは三重の変化あるいは征服である。すなわち、複雑な生態系は近代的で単純な形態（たとえばプランテーションやランシング、エビの養殖地など）につくり変えられているし（生態学的次元）、地域の多様な経済は近代的で市場志向の経済に変質させられ（経済的次元）、そして特定の場所（place）を基礎としたローカルな文化は、経済発展を至上のものとする個人主義的、近代的な文化に転化することを強いられている。

グローバル化の過程では、地球上の隅々までドミナントな西欧文化が浸透したかのようにみえるが、しかし、この世界の差異がなくなることはなかった。人びとは、以前には思いもよらなかったかたちで出会い、価値観の衝突がおこっている。そして、さまざまな成功の機会や資源へのアクセスをコントロールしている少数の人びとが、異なる文化をもち経済的には弱者である人びとを排除したり、あるいは同化しつつ（差異を否定して）支配する傾向がつよくなっている。差異を尊重しながら平等を達成することは（difference-in-equality）、なかなか実現しない。

ポリティカル・エコロジー論が登場するまえには、ポリティカル・エコノミー論があった。これは、「資源へのアクセスとコントロールをめぐるコンフリクト」の経済的次元に関する研究であるが、コンフリクトには社会的な権力が関連していること、すなわち政治的な側面があることを前提としていた。しかし経済学者たちは、資源へのアクセスとコントロールには生態学的次元や文化的次元があることには関心を払わなかった。こうした欠点をおぎなうべく登場したのがポリティカル・エコロジー論である。

* * *

島田（2007: 11-17）が指摘しているようにポリティカル・エコロジー論は複数の系譜をたどりながら発展してきたし、みずからポリティカル・エコロジー論者を名乗る研究者には、じつに多様な立場をとる人びとが含まれている。ここで紹介してきたエスコバルは、徹底的な反本質主義の視座をとることによって、現象を政治的な言説の束として把握する姿勢をつらぬいている。たとえば彼にとって「自然」とは、人間がそれに意味を与えて言説を生産する（discursive な）プロセスによって構築されるものである（Escobar 1999）。

彼が理論的に依拠しているのは知識と権力をめぐるフーコーの議論であるし、彼が目指すところは、ヨーロッパ近代による支配構造の解読と告発、ローカルで土着な知識の復権、多元的な文化の承認といったように、政治運動と深くかかわっている。実際に彼は「世界社会フォーラム」に主導的な立場で参加していた。つまりエスコバルの議論は、ポリティカル・エコロジー論全体のなかで、ひとつの極に位置するものである。

ポリティカル・エコロジー論の系譜のひとつは、比較的小規模な社会を対象とした人類学的な営為が、その社会を閉鎖系であるかのようにあつかってきたことに対する批判や、外部からの政治的、経済的な影響を受けてきた歴史を考慮してこなかったという反省から生まれている。こうした系譜に属し実証的な研究を重視する者は、エスコバルのような「言説アプローチ」に対しては、どちらかといえば批判的である。その要点を端的にいうならば「彼らはエコロジーを名乗りながら、実際には環境の変化を具体的に検証していない」というものである。たとえば、Vayda & Walters (1999) は「Against Political Ecology」と題した論文のなかで、「(ポリティカル・エコロジー論は) ecology without politics に対して大げさに反応することを続けたために、いまや politics without ecology ともいうべきものになってしまった」と批判している。これは、人間の生態に関する経験主義的な研究をつみかさねてきた Vayda らしい表現である。ただしエスコバルの著作は、もともと自然科学者として訓練を受けていたという経験があるためか、あくまでも言説の分析に依拠しつつも、自然科学の成果にも十分な目配りをしている（たとえば、Escobar 1999）。

* * *

『銃・病原菌・鉄』でピューリッツァー賞を受賞したジャレド・ダイヤモンドは、朝日新聞のインタビューのなかで、環境破壊や人口爆発、そしてエネルギー問題について語りながら、非常に暗鬱な未来を以下のように予想している（ダイヤモンド 2012）。私たちはいま、環境が再生するペースをはるかに上回るスピードで環境を破壊している。このまま大量にエネルギーを消費する生活を続けるならば、50年以内に現代文明全体が崩壊の危機に陥る。それを回避できる可能性は51%、できない可能性は49%である。

しかしながらダイヤモンドは、同じインタビューのなかで「脱原発」には反対であることを表明している。原発にともなう問題は、石油や石炭を使い続けることで起きる問題にくらべれば小さい、化石燃料に頼ることによって放出される二酸化炭素による地球温暖化は、放射能による危険よりもはるかに重大であり、現代文明のゆくすえを左右しかねない、というのである。

これに対して小出（2011）は、原子力発電も大量の二酸化炭素を放出しているという。原子力発電所を建設するために必要なコンクリートや鋼鉄を生産し、建物を建てるためには膨大な資材やエネルギーが投入されているし、さらにまた、燃料として必要なウランを採掘、運搬、製錬・濃縮・加工するためにも莫大な二酸化炭素が放出されている。そして原子力発電所を現在の科学の力では十分に制御できないことは確かである。こうした事実を目をつぶって原子力発電が「クリーン」で「エコ」であると喧伝するのはまちがいだ、

と、小出はつよく主張している。

このように、専門家たち、科学者たちは統一した見解を示してくれない。それゆえに、わたしたちに求められていることは、科学による「神の声」を待つのではなく、「決断する」という性格のものであるように思われる。

参考文献

- 足立明、1995「経済2：開発現象と人類学」米山俊直（編）『現代人類学を学ぶ人のために』、世界思想社、pp. 119-138.
- 小出裕章、2011『原発のウソ』扶桑社
- 島田周平、2007『アフリカ 可能性を生きる農民』京都大学学術出版会
- セン、ジャイ、アニタ・アナンド、アルトゥーロ・エスコバル、ピーター・ウォーターマン（編）、2005『世界社会フォーラム—帝国への挑戦』武藤一羊・戸田清・小倉利丸・大屋定晴（監訳）、作品社
- ダイヤモンド、ジャレド、2012「文明崩壊への警告」朝日新聞 2012年1月3日（インタビュー）
- Batterbury, S. P. J. and J. L. Fernando, 2011. Arturo Escobar. In P. Hubbard, R. Kitchin and G. Valentine (eds.) *Key Thinkers on Space and Place*. London: Sage, pp. 154-160.
- Escobar, A., 2008. *Territories of Difference: Place, Movements, Life, Redes*. Durham & London: Duke University Press.
- Escobar, A., 2006. Difference and conflict in the struggle over natural resources: A political ecology framework. *Development*, 49 (3): 6-13.
- Escobar, A., 1999. After nature: Steps to an anti-essentialist political ecology. *Current Anthropology* 40 (1): 1-30.
- Escobar, A., 1998. Whose knowledge, whose nature? Biodiversity, conservation, and the political ecology of social movements. *Journal of Political Ecology* 5: 53-82.
- Escobar, A., 1995. *Encountering Development: The Making and Unmaking of the Third World*. Princeton: Princeton University Press.
- Escobar, A., 1991. Anthropology and the development encounter: The making and marketing of development anthropology. *American Ethnologist* 18: 658-682.
- Hubbard, P., and R. Kitchin (eds.), 2011. *Key Thinkers on Space and Place (Second Edition)*. London: Sage.
- Vayda, A. P., and B. B. Walters, 1999. Against political ecology. *Human Ecology* 27 (1): 167-179.